南風原町身体障害者福祉会

ゆうあいの広場

第2号

令和4年新年　あ　い　さ　つ

南風原町身体障害者福祉会
会長　金城　則文

あけましておめでとうございます。

会員の皆様におかれましては、輝かしい新年をお迎えのこととお喜び申し上げます。また、平素より南風原町身体障害者福祉会の事業に対し、ご理解とご協力をいただき、誠にありがとうございます。

さて、当会では、昨年も身体障害者の福祉の向上と親睦を図るための事業活動を色々と計画していましたが、新型コロナウイルスの影響で、ほとんどの事業が延期、又は中止の状態になりました。また沖縄県身体障害者福祉協会等、他団体が主催する研修会やスポーツ大会にも参加を控えてまいりました。そのような中、年の後半、感染者が少なくなってきたことから参加、開催できた行事が、視覚障害者卓球大会、沖縄県障害者福祉大会、グラウンド・ゴルフ大会でした。グラウンド・ゴルフ大会は短い時間ではありましたが、久しぶりの面々に、和気あいあいと楽しいひと時を過ごすことが出来ました。

コロナ禍にあって、厳しい社会情勢でありますが、今年も会員の皆様に喜んでいただけるような事業を計画してまいります。ご理解とご協力をお願い致します。念頭に当たり、今年も皆様にとって良い年でありますよう、祈念申し上げます。

令和3年度沖縄県身体障害者スポーツ競技会

11月13日(土)、卓球競技(サウンドテーブルテニス)の部へ南風原町より大城春彦さん、中村清子さんの2名が出場しました。

昨年度は新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止となった「沖縄県身体障害者スポーツ大会」が今年は豊見城市民体育館で行われ、「スポーツ競技会」として2年ぶりの試合となりました。未だ収まらないコロナの影響により縮小した競技となり、沖縄本島と宮古島からの参加があり男女合わせて20名となりました。

今回は、交流が主でしたが参加された大城さんは「練習不足で緊張しました。思ったより力が発揮できなくて残念でした。」中村さんは「短い時間でしたが楽しい時間が過ごせました。」と久しぶりに友人らに会えたことを喜んでいました。

多目的室を締め切って、1試合ずつ選手と審判員のみが入室となり、試合は男女混合での対戦でした

サウンドテーブルテニス(STT):プレイヤーはアイマスクを使い、金属が入った音のなるピンポン球を転がして打ち合う卓球です。
身障福祉会では、毎月第1・第3日曜日、午後2時よりちむぐくる館で活動しています。
都合により休止する場合もありますので事務局まで確認をお願いします。

南風原町社会福祉協議会内　身体障害者福祉会
事務局:赤嶺(098-889-3213)

南風原町第2民児協(障がい福祉部会)の勉強会に参加

11月12日(金)町保健福祉課・障がい者福祉班の當間しのぶ班長を講師に迎え、障害者福祉についての勉強会がありました。

民生委員・児童委員は、地域住民の「見守り役」「身近な相談相手」として専門機関へのつなぎ役として活動しているボランティアです。

今回、民生委員の障がい福祉部会が障害を持つ方の相談に対応できるように、また身障福祉会や担当課の職員と交流をする目的で勉強会をもち、身障福祉会から金城則文会長と屋比久孟善副会長の2名が参加し交流を図りました。

當間班長より「第5次南風原町障がい者計画・南風原町第6期障がい福祉計画・南風原町第2期障がい児福祉計画」(令和3年度～令和5年度)をもとに、障がい者を取り巻く状況や計画の内容説明と「福祉のしおり」をもとに南風原町が行う障害者制度の紹介がありました。

意見交換の場では、金城則文会長から、ご本人が装着している補装具について、実物を見せながら説明があり、作製の苦労や装着時の工夫について、参加者からの質問に答えながら話がありました。

これからも身障福祉会は民生委員とともに、障害者のみならず、みんなが生まれ育った場所で自分らしく生活ができるよう、お互いに交流を深めながら活動を通して協力してまいります。

「福祉のしおり」(令和2年改訂)は、南風原町の福祉制度の紹介をしています。
南風原町社会福祉協議会、南風原町保健福祉課窓口にてお求めください。

会員の広場

人間の秘めた力

大名区在住
小橋川恒一

東京都は2020年夏季オリンピックの開催に立候補し誘致活動を積極的に推進してきた。その結果、2013年9月にジャック・ロベIOC会長から開催都市として「トウキョウ」と発表された時は、およそ半世紀ぶりに東京でオリンピックが開催されることになったことから、夢が叶い日本中が歓喜に包まれた。

競技施設も着々と進み、アスリートの皆さんもその時に思いを馳せ鍛錬を重ねていた。そのような最中、中国の武漢市で新型コロナウイルスのまん延が伝えられた。水際対策を講じ、感染予防に努めたが、功を奏さずまたたくまに世界各国へ感染が拡大していった。そのことにより東京オリンピック開催も1年延期を余儀なくされた。

しかし、その後も新型コロナウイルスの感染拡大は1波、2波、3波、4波と押し寄せ、開催が近づいても衰えるところが見えず、5波として感染拡大が続いている最中での、オリンピック及びパラリンピックの開催となったために、当初、国民が望んでいた華やかなオリンピックとは違い残念ながら苦渋の選択として無観客で実施されることになった。

無観客での試合とはいえアスリートたちがこれまで鍛錬してきた力を存分に発揮し繰り広げられる熱戦に、テレビの映像を通して一喜一憂して観戦した。その結果日本選手団が獲得したメダルは、金27個、総数58個で、ともに史上最多を更新した。異例の状況下、華々しい活躍で自国開催の祭典を彩った。

県内からも数名のアスリートの方々がオリンピックに出場し、持てる力を存分に発揮し、金2個、銅1個に輝く大活躍であった。それぞれの試合には胸の高鳴る思いで観戦し、応援したものである。ことに喜友名諒選手の金メダルは、空手発祥の地・沖縄で生まれた空手家が、沖縄初の五輪金メダリストになったことは、大変意義深いものであることだと思われる。また南風原町大名にルーツに持つ、女子柔道48キロ級に出場した渡名喜風南（ふうな）選手の試合はテレビにかじりついて応援した。銀メダルに輝いたことは大変喜ばしいことである。大名にお住まいの渡名喜庸善（ようぜん）（祖父）さんの喜びの表情は新聞に掲載されたところである。

東京オリンピック夏季大会はアスリートの熱戦と混乱の中で祭典に幕を閉じ、引き続き「誰もが暮らしやすい共生社会の実現」を理念として、共生の未来を託して東京パラリンピックが開催された。国際パラリンピック委員会（IPC）会長（アンドルー・パーソンズ氏）は、東京パラリンピックの信条は「スポーツ界から革命を起こす。」新型コロナウイルス禍の中で開催する東京パラリンピックを「最も歴史的な大会」と位置づけ、大会を契機に障害者の人権を守る「We　The　15」活動を開始した。活動は、世界の人口の15%に当たる約12億人に何らかの障害があるとの推計に基づく。アスリートだけでなく、全ての障害者に対し差別のない社会を目指す取り組みだ。更に「パラリンピックは世界で唯一、障害者に光を当てる大会だ」と述べられた。

競技は、運動機能障害、視覚障害、知的障害、脳性まひ等、更に障害の程度によりクラス分けされて競技が行われた。アスリートたちは身体に障害があることで日常生活にも不自由を感じている中において、肉体の限界に挑戦し鍛え上げた技で、懸命に競技に臨んでいる姿には感動した。県内からも数名の方が参加し競技に臨まれた。その中で、上与那原寛和選手が、車いす陸上400・1500で銅メダルを獲得されたことはアッパレであった。

競技種目の中で感じたことの一つとして、南風原町身体障害者福祉会のスポーツ行事の一つとして実施されている「ボッチャ」の種目がある。ボッチャは健常者の競技として実施されている「カーリン

グ」とよく似ていることに気づいた。双方とも、相手チームの玉を得点圏外へ弾き出して自チームの得点へ結び付ける競技である。

ちなみにボッチャは、ボッチーから派生した障害者とりわけ脳性麻痺の障害がある競技者向けに考案された障害者スポーツの一つである。現在、南風原町身体障害者福祉会では、スポーツ行事の種目の一つとして、このボッチャをアレンジし、個人の得点制で行っている。

東京オリンピック及び東京パラリンピックについての感想を記したが、新型コロナウイルスの感染拡大により開催の可否等いろいろと世論もあったが、アスリートが力の限りを尽くして戦っている姿を見て、これまで培ってきた力を存分に発揮する場となったことは、大変意義深いオリンピック及びパラリンピックであったと思われる。ことにパラリンピックに参加したアスリートたちの戦いを見ていると人間の秘めた力を感じた。

障害者の一人として感動と勇気をもらった。障害をお持ちの皆様おくすることなく共生社会の実現に向けて共に頑張りましょう。今回開催されたパラリンピックを機に共生社会の実現に理解が深まることを期待したい。

『グラウンド・ゴルフ大会』開催しました!!

11月27日（土）、本部公園で南風原町身体障害者福祉会主催の「グラウンド・ゴルフ大会」を開催しました。今年度初めての行事となりましたが、会員13人（内視覚部２人、聴覚部２人）が集まり、ボランティアとして音訳サークルたんぽぽより１人、手話サークルこがねもりより１人が参加し、久しぶりに会う仲間とともに楽しむことができました。

ちらつく雨の中、5人1組、3チームでスタートしたとたん、雨も止み最後までプレーをすることができました。スタートが遅れたため1ゲームしか行うことができませんでしたが、久しぶりのプレーにみんな大張り切り。ホールインワンを狙うがボールが芝にとられ、なかなか思うように進まず落胆する声や目の不自由な方のためにホール位置を案内する声、黙々とそして着実に得点を上げて笑みを浮かべる者もいて、それぞれにとても楽しんでいました。

1位は参加者の中で一番高齢の仲里建一（なかざとけんいち）さん、2位は同点で上原直三（うえはらなおみつ）さんと野原龍信（のはらたつのぶ）さんでした。またホールインワン賞は2位の上原さんと又吉寿成（またよしじゅせい）さんのお二人でした。

1位の仲里さんは「とても楽しかった。もっとプレーしたかった。」と久しぶりのグラウンド・ゴルフに喜んでいました。

今回、一緒に参加していただいた二人のボランティアさん、ボールの位置やホールまでの距離など誘導してくれた「音訳サークルたんぽぽ」の仲地博巳（なかちひろみ）さん、手話通訳をしながら場を盛り上げてくれた「手話サークルこがねもり」の兼島（かねしま）ゆかりさん、ご協力ありがとうございました。